青梅市の現状について

１．地勢と沿革

青梅市の総面積は 103.31 ㎢に及び、東京都の市区町村で５番目に広い面積を有しています。市域の西部は御岳山など標高 1,000m近い山々が連なる秩父多摩甲斐国立公園の山地であり、東部は多摩川によって形づくられた比較的平坦な扇状地、北部は山地や丘陵地、河川によって構成された地域となっています。緑豊かな山並みと、名水百選に指定されている御岳渓谷などの美しい渓谷に囲まれた、自然に恵まれた地域です。

青梅市は、東京都の西北部、都心から概ね 50 ㎞圏に位置しています。JR 青梅線によって東京都心方面及び奥多摩方面と結ばれており、通勤・通学やレジャーでの利便性が高くなっています。また、東京都新宿区から山梨県甲府市に至る青梅街道や、吉野街道などによって他の地域と結ばれているほか、首都圏中央連絡自動車道（圏央道）青梅インターチェンジによって埼玉県・神奈川県方面とも結ばれており、広域的な交通利便性が高くなっています。

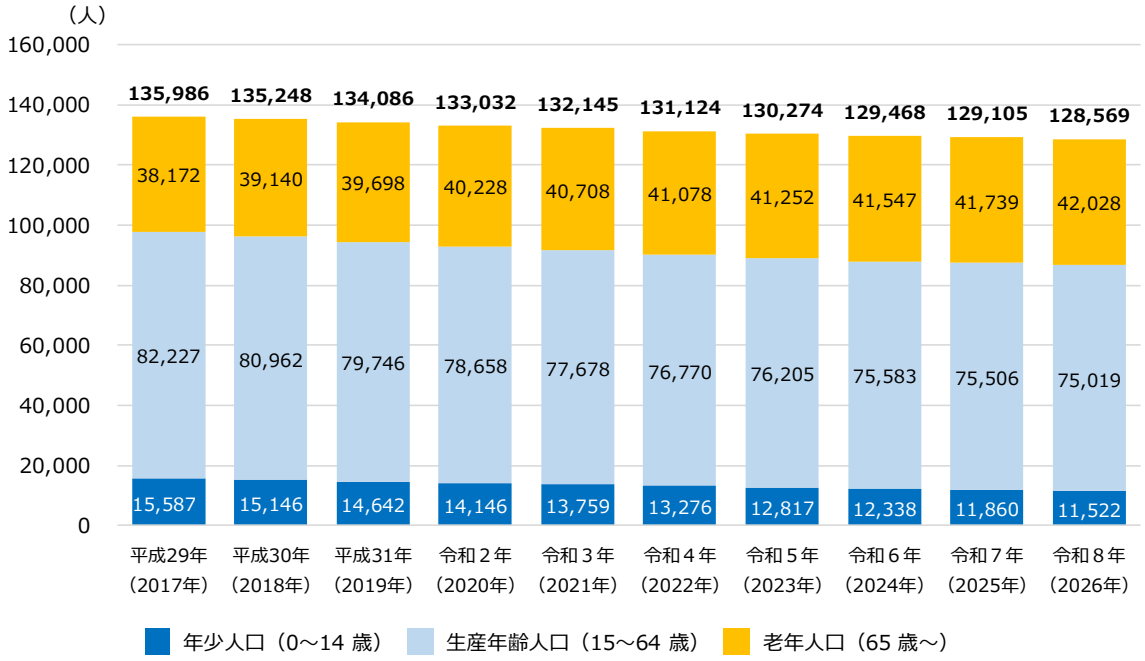
多摩川・荒川両水系の豊かな水に恵まれた青梅市の市域では、古くから集落が営まれました。鎌倉・室町時代には三田氏が勝沼城などを拠点に勢力を伸ばし、武蔵御嶽神社・塩船観音寺などの神社仏閣の再興もなされました。江戸時代から明治時代にかけては青梅街道の宿場町として賑わい、また、多摩川・荒川水系の水運などによって石灰や木材の産出、「青梅縞」などの織物といった産業が活況を極め、市域は発展しました。

昭和 26（1951）年に青梅町・霞村・調布村が合併し、東京都下５番目の市として「青梅市」が誕生しました。さらに昭和 30（1955）年には、吉野村・三田村・小曾木村・成木村が編入され、現在の市域となりました。戦後は、急速な復興と高度経済成長の流れを受け伝統的な基幹産業であった林業や織物業は衰退し、代わって住宅や工業が立地するなど、急速な都市化が進みました。

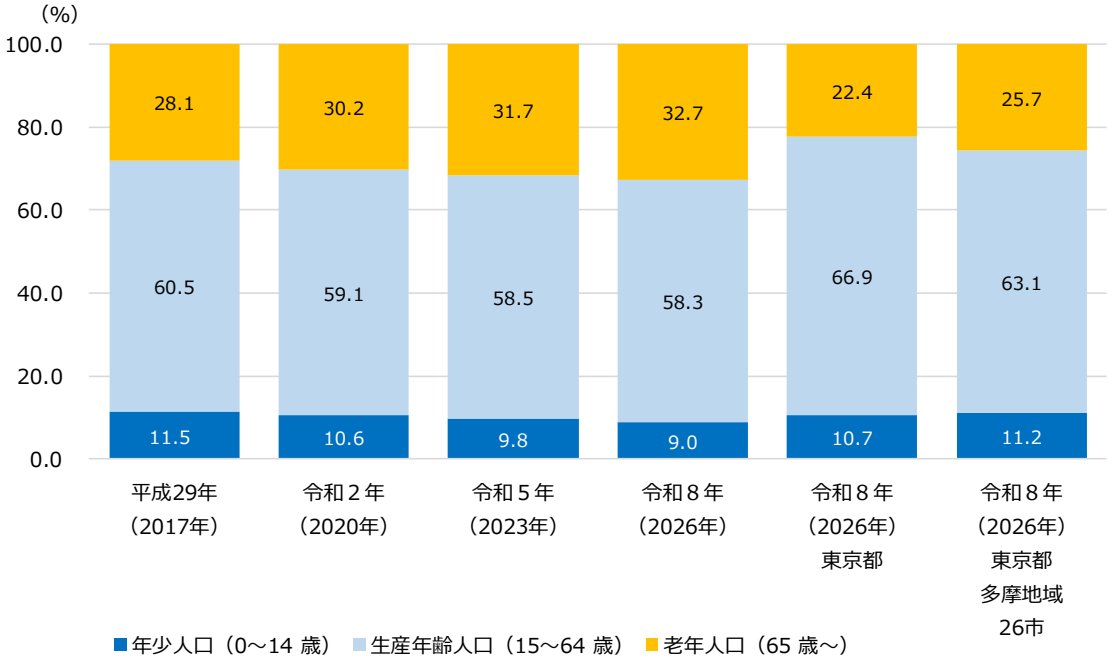
面積の６割以上を森林が占める青梅市では、多摩川の御岳渓谷や御岳山周辺などがアウトドアの拠点として親しまれています。また、古を偲ばせる街並みや史跡、青梅大祭などで披露される伝統芸能のほか、市民マラソンの草分けである青梅マラソンが毎年盛況をみせているなど、青梅市では、東京都下にあって特徴的な歴史と文化が息づいています。

２．人口

令和８年（2026 年）の総人口は 128,569 人となっています。平成 29 年（2017 年）から 7,417 人（5.5%）の減少であり、緩やかな減少傾向が続いています。年少人口（０～14 歳）及び生産年齢人口（15～64 歳）が減少する一方、老年人口（65 歳以上）が増加しています。令和８年（2026 年）の高齢化率は 32.7%であり、東京都及び多摩地域 26 市の水準を上回って高齢化が進んでいます。



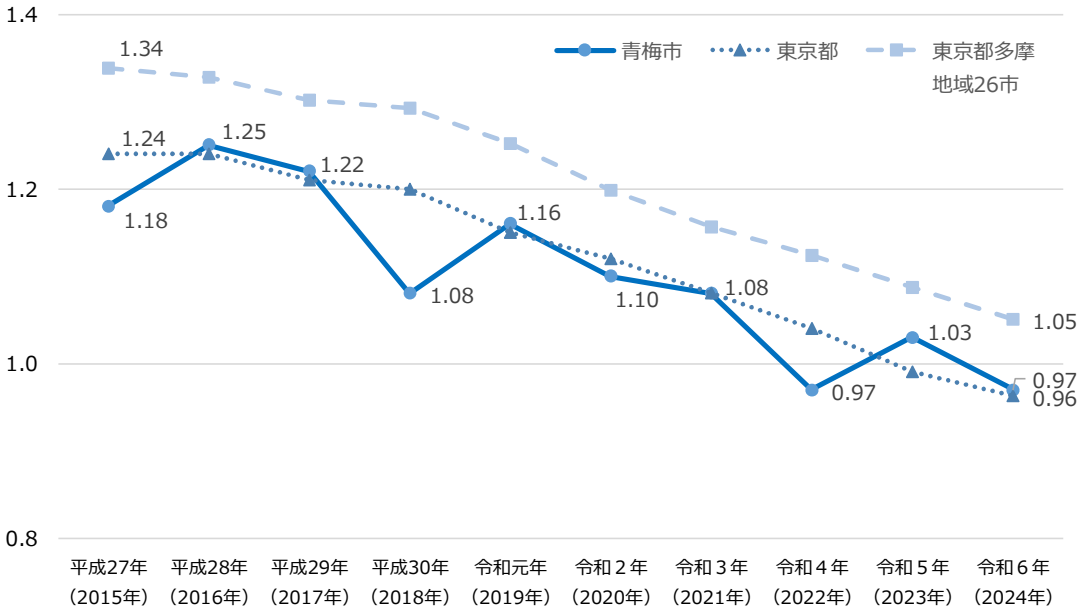
出典：総務省「住民基本台帳年齢階級別人口」（各年１月１日現在）



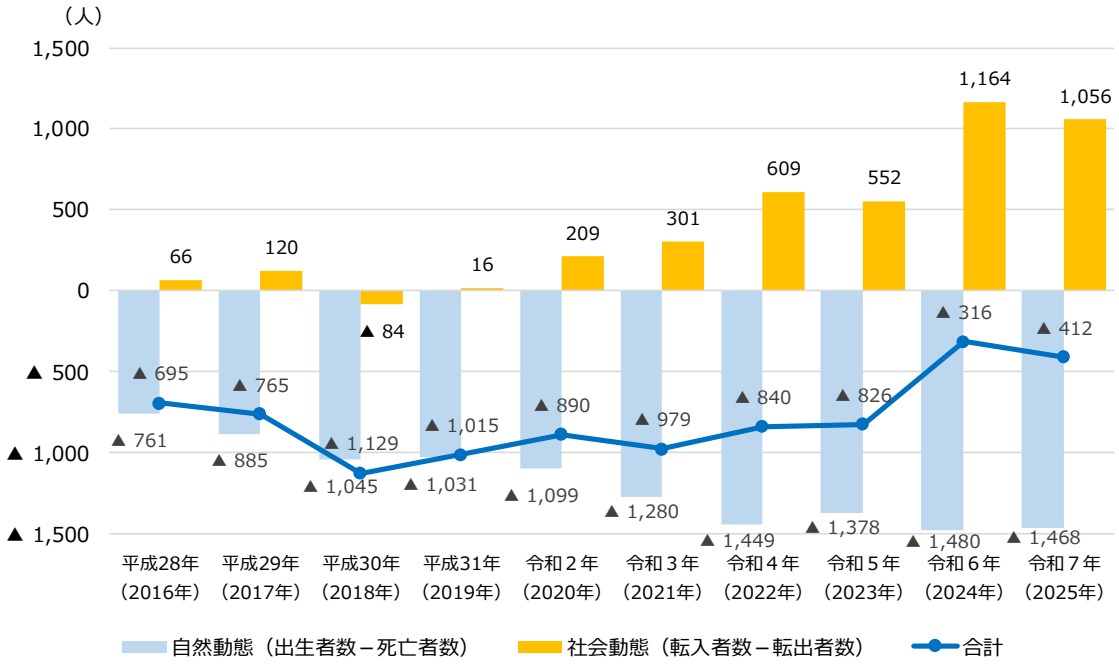
出典：総務省「住民基本台帳年齢階級別人口」（各年１月１日現在）

３．人口動態

令和６年（2024 年）の合計特殊出生率は 0.97 となっています。東京都及び多摩地域 26 市とほぼ同じ水準であり、低下傾向が続いています。出生者数が減少する一方、死亡者数は年間約 2,000 人で高止まり傾向にあります。一方、転入者数は増加傾向にあり、転入者数が転出者数を上回る社会増の状況にあります。出生者数を死亡者数が上回る自然減が社会増の規模を上回っているため、青梅市の人口は緩やかに減少傾向しています。



出典：東京都「人口動態統計年報（確定数）」

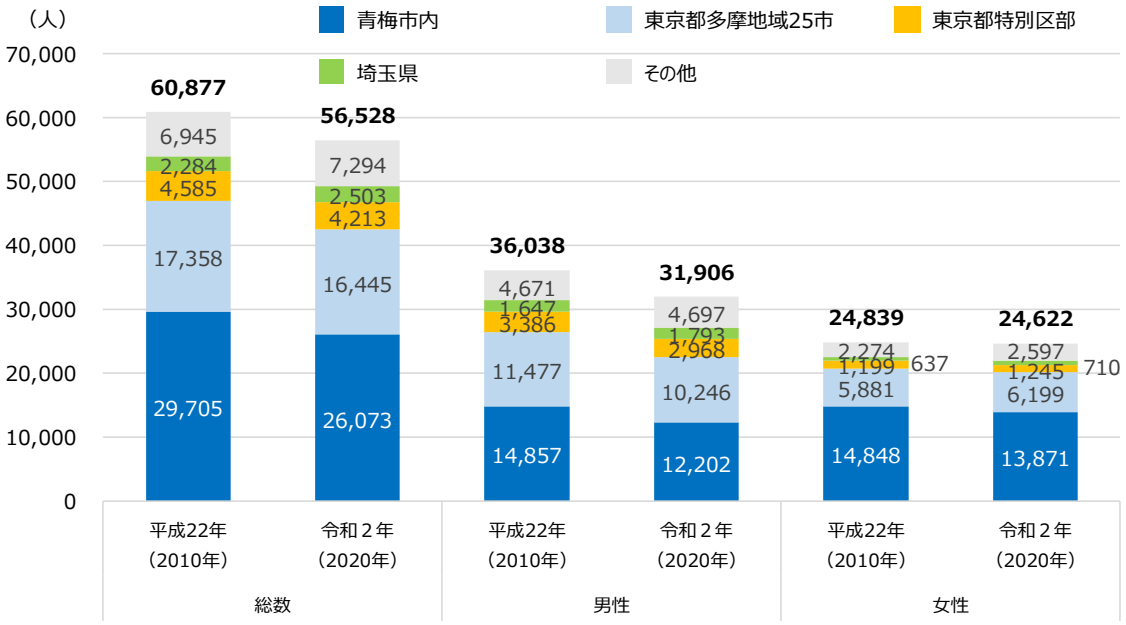


資料：総務省「住民基本台帳人口・世帯数、人口動態」

４．就業と産業

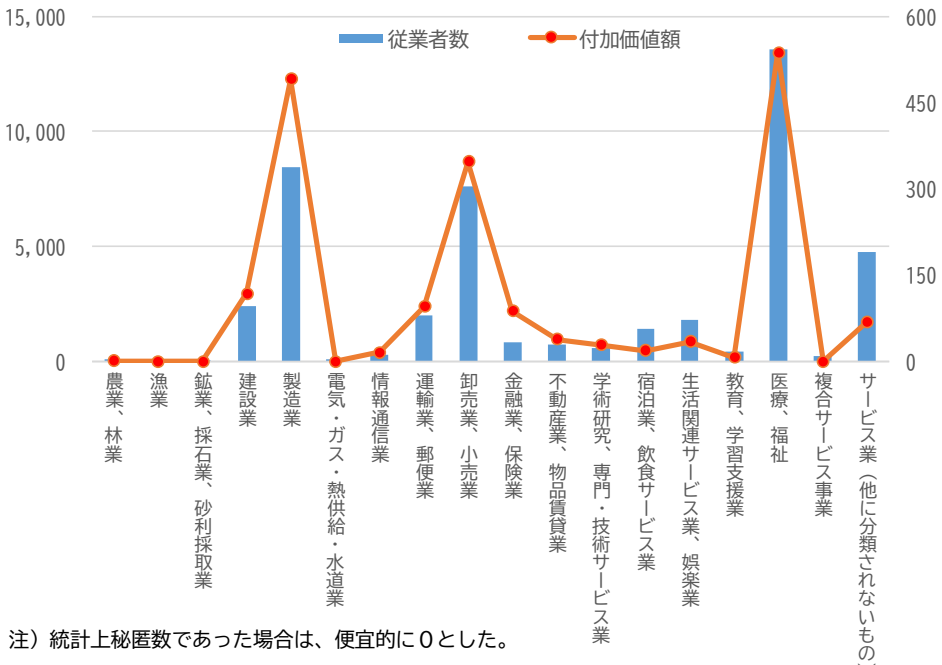
15 歳以上就業者の従業先をみると、市内での従業が最も多くなっています。令和２年（2020）年の自市内従業割合は 46.1%であり、約半数にのぼっています。平成 22 年（2010 年）から令和２年（2020）年にかけ、男性の就業者は大幅減となりましたが、女性についてはほぼ同じ就業者数の規模を維持しています。

市内での産業に従業する者の数と付加価値額をみると、医療・福祉、製造業、卸売業・小売業が多くなっており、これらが基幹的な産業となっています。



資料：総務省「国勢調査」

産業大分類別従業者数（左軸、単位：人）と付加価値額（右軸、単位：億円）



注）統計上秘匿数であった場合は、便宜的に０とした。

出典：総務省・経済産業省「経済センサス－活動調査」（令和３年）